

〔第29回学術集会 シンポジウム1〕

看取り文化の伝承 —ホームホスピスわれもこうの活動—

熊本保健科学大学大学院・NPO老いと病いの文化研究所ホームホスピスわれもこう

竹熊 千晶

天草の旧御所浦町で保健師として働いていた頃、いつものように寝たきりのおばあちゃんを訪問し介護をしていたお嫁さんに「大変ですね」と声をかけると、返ってきた答えは「なあん、私の“のさり”ですもん」という言葉とくったくのない笑顔でした。日常生活のなかでの“恵み”を意味するこの方言は、「老いること」や「病いをもつこと」を天命として受け止め、そこから前に進む明るさと勇気があると思っています。

医療の高度化、長寿化は自ずと介護の長期化、重度化をもたらしました。一方で、独居高齢者や老夫婦二人暮らしの増加、家族の生活様式の多様化は、介護保険の制度があったとしても、長期の在宅での療養や看取りを困難な形にしている場合が少なくありません。われもこうのある熊本市も同様だと思います。

そこで私たちは、重度の認知症、がん末期や進行する難病の人たちなど家で看たくても看ることができない、医療依存度が高く家族だけでは不安、病院では死にたくない、大きな施設には入りたくない、などの人たちのための安心して過ごせる居場所として、「ホームホスピスわれもこう」を始めました。1996年に宮崎の「かあさんの家」から始まったこのホームホスピスは、現在、神戸・尼崎・熊本・久留米・広島など全国で40ヶ所以上になっています。ここは、要介護の状態になっても、最期の時まで、その人がそれまで暮らしていたように過ごせる、もうひとつの居場所です。ふすまや障子で仕切られた民家は、人の気配が感じられる程よい空間であり、その家主がそれまで生活されていた台所

や仏壇、縁側、庭もそのまま残っています。ご飯の支度をする匂い、お風呂がわく匂い、住人の話し声や足音、雨音、スタッフだけでなく家族や近隣の人々や郵便屋さんが出入りする空気は、要介護の入居者にそのまま安心感として伝わるような気がします。地域にある家に住むということは、地域のなかでの関係性がそのままつながるというメリットがあります。回覧板を回したり、ごみを出しにいったり、外で洗濯物を干したり、雨が降ったら取り込んだり、近所の人とは挨拶を交わし、おすそ分けをしたり、といった日々の暮らしが継続されることです。

われもこうの最初の住人はK先生でした。気管切開、鼻腔栄養し要介護5の状態で退院してこれたK先生はニコニコしながら私たちのケアを見守ってくださいました。90代で認知症のあるF子さんは、仕事で忙しく毎日のお世話が負担になってきた娘に向かって「なんとかなる！」と諭しておられました。認知症で徘徊の症状があったM子さんが夜にご近所で保護されたとき、保護してくれたおばあちゃんが「うちの爺さんもこがんだったよ」と私たちを慰めてくれました。またある時、われもこうで消火訓練をしたとき、お隣のおばちゃんが「私はどのばあちゃんば連れていかなんとね？」と声をかけてくれました。

超高齢多死社会の今、地域で看取りを行うことは、家族や地域の力を緩やかにつなぎ直し、今より少しは暮らしやすい世の中になっていく可能性があると思います。